

県央・宇都宮版

遭難したら番号伝えて

場所特定の看板設置

宇都宮・古賀志山 登山愛好家ら 月内に27カ所

【宇都宮】市内外の登山愛好家らでつくるNPO法人「古賀志山を守ろう会」(池田正夫理事長)は9日、遭難者が居場所を救助ヘリなどに伝える番号を記載した看板を、市北西部の古賀志山(583㍎)周辺の登山道や名所計8カ所に設置した。遭難事故が発生した際、登山者が看板に記載されている番号を救助側に伝えれば、居場所が分かり捜索しやすくなる。同会は今月末までに新たに19カ所設置する予定で、「円滑な人命救助や重大事故の防止に役立ってほしい」と期待している。

(飯田ちはる)

鋼板を用いた看板(縦、横各22㍎)は黄色に塗られ、1〜27の数字と共に「緊急連絡時現在地番号」などの文字が黒で書かれている。この日は会員ら約10人が参

加。ペンチなどを使い、登山道にある木や道標に1〜8の数字が入った看板をワイヤで順次取り付けた。県の防災ヘリ「おおるり」が2015年度、遭難者な

どの救助を目的に古賀志山付近へ出動した件数は4件で前年度より2件増えた。同会員で県山岳遭難防止対策協議会の小島守夫会長

(76)は「古賀志山は険しい登山道が多く、けがをしやすい」と分析。さらに「登山ブームの影響で軽装備で登ってしまう人がいる」と指摘する。

一方、救助ヘリが出動しても遭難者の居場所は分かりにくい。県消防防災課によると、「遭難者の服装や木の葉の茂り具合などから、上空からの救助が困難なケースもある」という。

同会は宇都宮中央署や市消防本部と話し合いを重ね、看板の設置を検討。記載した番号の位置を警察や消防が事前に把握することで、円滑な人命救助に努める。池田会長(79)は「山の事故が少しでも減ってほしい」と話していた。



看板を取り付ける古賀志山を守ろう会のメンバー

夢のドリル

